展 景

季 刊

No.84

Winter 2016

季刊　展景 84号

目次

月桂樹〈短歌〉……丸山弘子　4
モザンビークの海〈短歌〉……結城　文　6
北上行その後〈短歌〉……池田桂一　8
歌集『紅』〈短歌〉……市川茂子　10
張り紙〈短歌〉……小野澤繁雄　12
光和小学校の運動会〈短歌〉……河村郁子　14
秋景色〈俳句〉……谷垣満壽子　16
秋夕焼〈俳句〉……新野祐子　18
拾ふ〈短歌〉……布宮慈子　20
東京歌会（第四十六～四十八回）……22
道具の話……松井淑子　28
〈那須通信 29〉バランスについて……加藤文子　30
〈薫風颯々 4〉農作物の小粋なネーミング……神村ふじを　34
忘れぬうちに（上）……河内愛子　38
対詠　ごきげんいかが？　PART 60……小野澤／布宮／河村　50
前号作品短評A……54
前号作品短評B……56
エッセイ教室「清紫会」の作品より
止まった冷蔵庫……市川茂子　58
入院……大石久美　60
「清紫会」だより……63
無二の会短信……64
編集後記……68
今号のイメージ／ホウレンソウ

月桂樹

丸山弘子

雨晴れてつねより鵯(ひよ)の声透る若鳥らしき三羽ほど居り

晴天にめぐまれて鋏の音軽し月桂樹ひと本(もと)樹形ととのふ

となり家の庭の奥処(おくが)にくりぬきの岩の鉢中つはぶきの花

藤棚をすぎたるところの水場にて黄花菖蒲が蕾をもちぬ

和菓子屋の主の父の形見とふ盆栽の黄藤姿よろしき

はやばやと家内に入り来しこほろぎの小さきが風呂場に沿ひて歩めり

いかほどの効果ありしや白内障を遅らせるとふ目薬をさす

右肩の痛みはげしく朝夕の着替への辛さいつまでつづく

インフルエンザの疑似体験か体おもく予防接種ののちの発熱

集ひしは子と孫にしてわが母の二十三回忌無事にすませぬ

モザンビークの海

結城　文

ヘリコプターに見下す海は黄を帯びし緑を帯びし青の織りなす
わたつみの青きはてよりひしひしと水惑星の力うち寄す
渚べに小さき黒き魚の群れ水の光にゆらめきて過ぐ
まこと海は浮力もつなり砂に伸べし足おのづから浮かびくるなり

透明な水の底ひに白き砂黒きの巌（いはほ）の斑（はだら）なす見ゆ
管より水噴きシュノーケルする数人が魚のやうに群れて過ぎゆく
頭黒く胸白き鶴の七、八羽首伸べてプールの水を飲みをり
真昼間の直射日光強けれど木蔭のわれに触るる風涼し
光増す頭上の半月暗き海の一つ灯りを見つつ食事す
島よりもどる人らはなべて日焼けして肌より潮の香を漂はす

北上行その後

池田桂一

沿線の家並の中にきわ立ちて屋根に「えがお」の保育園あり
トンネルを幾つ越えしか定かには覚えぬうちに北上に着く
霧が晴れやがてまた霧が立ちこめるホテルの窓にしがみつく我
北上のホテルの窓ゆ川岸に建てる眺めに明日また文学館を尋ねんと思う

すりへりし母の軽石使いつつかかと擦(こす)りぬ今年の冬は
みぞれ降る一夜を過ぎて朝明けの頃に雨漏り廊下に及ぶ
廃屋と思いし扉は開かれて明日よりヤキトリを商うという
震度5のテレビに映るテロップにも慣れて見過ごす幾度となく
わが誕生記念に父の植えしという胡桃幹廻り二米六〇糎
葉の落ちて柿の実の色あざやかに紅葉に負けず輝きており

歌集『紅』

市川茂子

空家となりても灯る向い家に売物件のポスター貼らる

百日紅主なき家の窓覆う去年も今年も枝を広げて

鉢植えの稲穂こうべを垂れながらビルのかたえに夕陽浴びおり

鉢一つふえて咲きつぐ玉すだれ暮れ早き庭に白の浮き立つ

吾(あ)がそばに在わす思いに拠りゆくは歌集『紅(べに)』*にてそを開きたり

再びは逢うもならずに口惜しく歌の中にて言葉交わさん

歌稿持ち逢いにゆきたる喫茶店よみがえりくる遥かなる日よ

季(とき)くれば取り出だしては纏いゆく幾年も着古ししカーディガン

川底の砂一粒の存在が大空を舞う夢の中にて

紅葉の陽に照り映える道の辺に朽葉、縮れ葉木下にまろぶ

*布宮みつこの歌集

張り紙

小野澤繁雄

くぐもって舌打ちをする大院君を「明成皇后」はしばしばもみす
しるしらぬ花のつづきに飾られて図書館は踊り場に毬栗みっつ
花畑は丸ごとの丘にブルーサルビアみのがしやすく花色葉色
逆光に近づききたる少年がふいに消えたは自転車置場か

土手下に無花果の実のみえてきて見下ろしみるは何かあたらしく
つぎつぎに組の名呼ばれ校庭は運動会行進の練習か
水を制することの大変さ改良区の碑にのこしまた門樋が残る
電柱のはり紙禁止（県警）は張り紙にして字の大きさに紙の小ささ
片づかぬというのみならずその庭はふくらんでいるみちに隣に
猫の名にシロを読むかな白猫の所在探している張り紙に

光和小学校の運動会

河村郁子

散歩道の青空満たす喚声に足が向かひぬ運動会場
入口のテントの中の受付に住所と氏名と本人確認
許可証は安全ピン付赤いリボン観覧席のいちにんになる
身のまはりデジカメ、スマホにｉＰａｄしつかり構へる子育てパパたち

高学年リレーのゴールいつぱいにママのエールとパパの撮影
プログラムの種目の名付け楽しみぬ　ＧＯＧＯ綱引き、ダンシング玉入れ
学年別マス・ダンスはみな「表現」に副題「エイサー光和魂」など
６年生の「表現」は鼓笛隊なり「新しい挑戦」のパレード整然
組体操「ライドライドライド」の成功に６年生父母の涙が光る
校庭の隅に並(な)む鉢それぞれに朝顔の実が茶色に結ぶ

秋景色

谷垣滿壽子

見えぬ糸に引かるるごとく蜻蛉舞ふ

風の音鮮(あた)らしと聞く白露かな

畦一筋火の道に似て曼珠沙華

さつとみて黄なる唇(くち)もつ秋刀魚買ふ

日々待ちてやうやく梨の届きけり

手足伸ばし目覚むる朝小鳥来る

雁渡し土鍋そろそろ出す季節

天気予報の誤算うれしき秋日和

老いもかく生きよと映ゆる秋夕焼

老ゆるとは深まりゆける秋のごと

秋夕焼

新野祐子（にいの）

地を這うもの天上を向く厄日かな

子の宿るところ明るし天の川

はらわたの滾（たぎ）る秋刀魚のよく焼ける

彼岸花増える　世界はテロ続く

息上げて蔓竜胆（つるりんどう）を揺らしけり

樺の木の剝がれし皮を秋の手紙に

瑞龍院にて二句

麒麟彫る腕（かいな）たおやか小鳥来る

釣瓶落し木彫りの蜮（いき）の動き出す

木漏れ日のひかがみ過（よぎ）る湿地（しめじ）採り

秋夕焼（あきゆやけ）唐天竺のしじまより

拾ふ

布宮慈子（やすこ）

ブレーキを踏みて止まれば小さきがわれを見てゐる二つのまなこ

山越えの道をゆくとき目が合ひて軽きいのちを拾ひあげたり

この猫とここで会つたが百年目　いのちはかなくなりしひと過（よぎ）る

一つだけ開いてゐし病院ニャアと鳴くこの仔に水を水をください

いいことをしたわねと言ふ婦人あれば動物病院にわが息ととのふ

前足は折れていません咬まれたのでせう獣医師はレントゲン見つつ

腫れてゐる前足なにに咬まれしか山ん中の生き物おそろし

長き尾をたてて仔猫は付き来たり部屋から部屋へ尻尾はアンテナ

拾ひ猫もらはれゆけば足元の涼しくなりて二夜かがやく

新しき名前もらひて小さきは広き野ひろき家にあそぶも

東京歌会（第四十六回）

平成二十八年八月十八日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

手を振って名を呼ぶ声に明るさに女子高生ら街かかわりても　小野澤繁雄

集まると、どこででもにぎやかな女子高校生たち。よく見る光景でもある。結句が判りにくい、また四句までとのつながりにも難がある。二、三句を含めて全体に切れすぎで、ながれていない、と。

「風まつり」と言う駅の名に心ゆるる　同胞親族（はらからうから）なべて遠退く　林　博子

嘱目としての駅名。ここでは「風まつり」だが、風があって「（心）ゆるる」というところ。現地で詠まれているようだ。そう読める。駅はまた多く旅の途上なので、下句、離郷者、年齢（高齢者）の立場から共感できるものがある。

二宮の駅前にして銅像がガラスのうさぎを抱きてゐたり　中川禮子

一首で、事実はしらされているが何か説明されていない感じがある。二宮、ガラスのうさぎ、とあることから、いくらか解に近い議論ができてはいたが。

知事の座に着かんと叫ぶ選挙カーをかこむ夏日の老若男女　市川茂子

老若男女（ろうにゃくなんにょ）は余り歌では詠まれていない。着座といういいかたがあるので、「着かん」でいいのか、また、知事の座は職責のことなので、その場合「就かん」となるのか。夏日の、なので、この間の都知事選のことであろう、と。選挙カー（を）でいったん切って、この、を、を取ったらいい、と。同じ夏日下で、作者はやや冷めている。

山道に赤き幟の立ち並び観音様の例祭を告ぐ　布宮慈子

みている通りとも、といってどこででも簡単に詠めるわけでもない。詠草は各二首なので、二首目でもう少し説明できるということがある。「岩谷（いはや）十八夜観音の火渡りは十八日にあるとふ見たし」（以上、二首目、こちらも好評）。

東京歌会（第四十七回）

平成二十八年九月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

夏枯れの庭そのままに幾日過ぐ心模様を見る思いなり　　市川茂子

下句がやや他人事で、じぶんの家の庭のことでない感じもする、と。小規模な庭か。そのままに、は、そのままにして。心模様をじかに云っていない、歌はかたちになっている。

犬にそのかまわれている女性には声もとどかず顔で云うのみ　　小野澤繁雄

犬をかまう、でなく犬にかまわれているという。下句でさらに説明しているが、声もムリで、顔ではいいということは可能だろうか。初句の、その、はいかにもとってつけたようなところ、音数合わせか。

この春は一だんと緑濃しときく兄逝きしより一月を経し　　中川禮子

ことしの春のおとずれを待たずに、という背意が読める。春の緑のことも、したがって他所事なのだ。ときく、の間接性、は少し議論された。一だんと、の表記についても。歌が機能している。よくわかる歌でもある。

就職に離（か）れゆきし子が物取りに帰り来て夕餉ののち帰りゆく　　林　博子

帰り、がかさなるので、（物取りに）よりて、としたと当日作者が直している。就職からそう時間が経過していない感じがする。子のふるまいのあっさりとしたところがいかにも今か。物取りに、も簡潔。よくわかるが、子の歌でなく孫歌だという。こういうことは多くなったかもしれない。

小雨にて煙る峠の山々は厳かにして無音の大きさ　　布宮慈子

どこの峠というか、日本の峠。一首目から、米沢、福島をつなぐ鉄道沿いということがしれている、これは二首目。墨絵をみるような感触がある。無音の大きさ、は含みのあるいいかたで、郷愁が大きくしているようなところがある。

東京歌会（第四十八回）

平成二十八年十月二十日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十二首。出席者五名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、松井淑子、丸山弘子）。

枕辺に歴史の本をあまた積み残しし兄の学びを思ふ　　中川禮子

机上でなく枕辺。積み残しし、には病んでいて、二首目で祭壇とあるので、（そのあと）喪ったようだった。その兄のことを詠っている。歴史の本という括り方、そこから、兄の学びを思ふ、には簡潔で気持ちのあるところ。

高橋は人の名ならず橋の名に今日みる歩き小名木川ぞい　　小野澤繁雄

高橋は、清洲橋（隅田川）寄り、小名木川に架かる橋で、読みは、たかばし、らしい。江東区は運河のまちで、川も橋も多い。そこを歩いたということでもある。何か雰囲気のある歌、ということになった。

名は知らねど覚え来し花の玉すだれ咲く秋立つ庭に　　市川茂子

玉すだれ、が余り知られていないので、上句で手続きをとったようだ。花の、も断っているところ。ヒガンバナ科の花で、二首目の、白の浮き立つ、からも白花ということがわかる。しみじみとしたところのある歌、と。

食草のパンジー花季過ぎたるにツマグロヒョウモンふらふらと居り　　丸山弘子

さいしょ誤って食卓と読んでしまったが、幼虫時代に、スミレ類（園芸種のパンジーまで）を食草としている。もともと南方系のチョウだが、生育域が北上した。ふらふらと居り、は、花季過ぎたるに、をよく受けているようだ。

稲刈りを待つばかりなる田んぼにて飛びたつてゆく白鷺青鷺　　布宮慈子

ほのぼのとした味がある。青鷺は水辺の鳥という理解がある。それもあるが、結句、白鷺一羽、などと白鷺に限ったほうがよいかもしれない、と。

ビルに浮かぶ入道雲愛（かな）しませ日々変りゆく朝を語らむ　　大石久美

作者の手術退院後の歌。秋の入道雲、ということもあるが、ビルの間に湧いて、それを見た朝も、別な朝も日々のことでもある。語ることのあることの、何か愛しさ、なのだろう。受身でもあるようだ。

（小野澤繁雄）

道具の話

松井淑子

鍋、釜はじめ身の回りの道具類は、年を経るうちに魂が宿るようになり、乱暴に扱われていると、いつか人間にいたずらをするようになる。こんな昔話を、子供のころ祖母から聞かされたことがある。

先日、扇風機を買い換えた。

古い扇風機は、私が就職して、アパートで独り住まいを始めたころに買ったものだから、何十年も大昔のものである。なぜこれほど長持ちしたかというと、昼間は私が仕事で留守にしているためほとんど使われず、そのうちエアコンが出回ってきて、そちらに乗り換えられてしまった、という事情が大きい。

扇風機がひんぱんに使われるようになったのは、むしろ、いまのマンションに越してきたここ数年のことである。このマンションでは、洗濯物の外干しはなるべく控えるよう、と言われているので、室内で、扇風機の風で洗濯物を乾かすことにした。以来、夏冬関係なく一年中、扇風機を出しっ放しにして、洗濯のたびに回している。

そのせいだろうか。しばらく前から、回しているうちにいつの間にか止まっていたり、揺さぶると動き出したりするようになった。そこで、どうなったのだろうと、最寄りの電気店に相談したところ、そうなったら発火のおそれがあり、危険だから、即刻使用をやめるように、と言われた。扇風機を買い換えたのは、そういう次第である。

新しい扇風機が届き、古いほうは廃棄処分することにした。新しいものと並べると古い扇風機はいかにも不格好で重たく、風量の切り換え段数も少なく、自動運転・自動停止を設定できるタイマーもついていない。新品より劣っているのは明らかだが、いざ捨てるとなると、どうにも哀憐の情がわいてきて捨てにくくなってしまった。

ふっと祖母の昔話を思い出した。そうか、何十年もいっしょに暮らしているうちに、この扇風機にも魂が宿ったのかもしれない。同じ捨てるなら、せめて感謝の気持をこめてきれいに磨き立てて捨てよう。そう思って、半日がかりで扇風機の掃除をしてやったことであった。

〈那須通信 29〉

バランスについて

加藤文子

櫻澤如一（さくらざわゆきかず）氏の『無双原理・易』という本を久々読みかえしている。

私にとっては難しい記述の多い中、ところどころ解るような内容に出合う。

宇宙万物は陰陽より成る。どちらか一方へ偏り過ぎると、支障が起きる。

そうであるならば、支障と思える事柄も均衡を保とうとする故の働きの一環、良いも悪いも簡単に判断は下せそうにない。

世界は加減を求めて運動しているようだ。

病気も然り、陰または陽の過剰がひきおこすもの。調和をとりもどすにはどうしたら良いのか、偏りの根本原因を探り、真の解決へ導く機会にしなければもったいない。

世界のなりたちの秘密、陰陽のバランス、起こることすべて、あらゆる現象にあてはめて捉えてみると感慨深いものがある。

老子の足るを知り、止(とど)まるを知るの境地とはいかに……。そんなことを思いめぐらす今日このごろ、先々予定しているスケッチ中心の展覧会のための絵を描いている。
植物が冬眠している今なら、ゆっくり時間もかけられる。
描きはじめに時間がかかることもあるが、大抵は後半、仕上がりが近づくに連れて大変になる。
加えてみるか、やめておくのか、加えるとすれば、どこにどう加えたら良いのか。
気負い過ぎてもくどくなるし、微妙なところだ。
余白もだいじ、余白を生かすための存在もだいじ。
もの足りないと感じるのか、充分と思うのか、今日の私の心のバランスが絵になっていく。

Photo : Kato Fumiko

二十代の頃から育てている小さなカリンの盆栽　晩秋の様子

〈薫風颯々 4〉

農作物の小粋なネーミング

神村ふじを

老後の愉しみに家庭菜園という方も多いと思うが、私の周りも例に洩れず朝の早いうちから耕耘機だの草刈機だの何ともかまびすしい。

退職後は畑に走るか犬猫を飼うか二手に分かれる。畑組は機械を手に入れてせっせと作業に精を出す。使えるうちはまだいいのだが、年をとってきて機械に手を焼き、畑や作物に対する情が失せてくると、ボケ防止に指先を使う石を磨く作業などに没頭するようになる。ここで犬猫組と合流し、石に飽きてくると表面に変化のある木の切り株などを磨き始め、これにも飽きてくると大体お迎えが来るというパターンらしい。私はまだ農作業に未練があり、研磨作業に向かう気になれないが、あと十年も経つと何かを磨いているかもしれない。

私の家には親が残してくれた畑があり、その親も年をとって耕耘作業や消毒ができなくなった時期があったので、勤めに出ていたときから畑作業はしていた。私なりに知識はあったのだが、やはり人任せのところがあって、責任という意味においてはまったく他人事であった。「任される」というのと「しなければならない」という義務感とでは、畑と向き合う姿勢がまったく違うかもしれないが、農作物を育てていると、ただのことを姿で彼らが返してくれるので、教育という仕事に携わってきた関係上、子育てとはずい分違うものだということに気付かされる。

春野菜、秋野菜と種苗を購入しなければならないが、最近の種苗のネーミングの面白さと言ったらない。ネーミングでハッとさせられれば、即購入意欲に火が点くというもの。種苗業者にしてみれば、したり顔になっているに違いない。

「怪豆黒頭巾」という枝豆がある。黒豆と言えば晩生種の「丹波黒豆」が有名だが、こちらは白毛の中早生種で黒豆にならないうちに枝豆として収穫する。ネーミングが素晴らしい。愉快の域を超えて脱帽である。こういう名前を付けた人ってどんな人だろうと思ってしまう。

サヤインゲンに「さつきみどり」という品種がある。古い世代にとっては、「おひまなら来てよね」の五月みどりをすぐに思い浮かべてしまう。濃緑筋なし丸莢のサヤインゲンで柔らかく食感がたまらない。生姜醤油やマヨネーズでいただきながら、温泉芸者姿の五月みどりを思い出してしまうのは私だけではないだろう。こまつ菜の品種に「こまつみどり」があるということをつい最近知った。姉妹で種苗として登録されているのはおそらくこの二人だけなのではないだろうか。ちなみに五月みどりと小松みどりの母は、私の町からそう遠くない舟形町の出身である。

トウモロコシの「ゴールドラッシュ」は黄色の粒が先端までびっしり詰まった優良種で、「ゴールドラッシュ」とはよくその意を得たりと感心させられる。そのほか、大相撲から発想を得た白菜の「舞の海」。軽快な取り口の小兵力士の名前を何とも上手く使ったものである。本人には悪いが、九月場所で角番から全勝優勝を果たした「豪栄道」よりは美味しそうである。ジャガイモの「インカのめざめ」なんていうのも原種のことに思いを寄せたロマンを感じるいいネーミングである。大根にもいい名前がないかどうかネットで検索していたら、「青大将二号」などという品種に出合ってしまった。これはあんまり食指が伸びないのだが……。

「ゆめぴりか」「青天の霹靂」「まっしぐら」は米のネーミング。北海道の「ゆめぴりか」は公募で選ばれたそうだが、「夢」とアイヌ語で「美しさ」を意味する「ピリカ」を組み合わせた愛らしい名前。ＡＮＡの国際線の機内食に採用されているらしい。「青天の霹靂」も「まっしぐら」も青森県の品種だが、熱帯生まれの米は北国でこそ花開いた感がある。

山形県の主力品種「はえぬき」。ブランド米「つや姫」が少しずつ幅を利かせつつあるが、栽培面積の六割を占めている優良品種だ。かつて、この「はえぬき」と同時に開発され世に出た「どまんなか」という品種がある。米沢の駅弁「牛肉どまんなか弁当」に今も使われていて駅弁はなかなかの人気である。だが、市場米としてはまったく見かけなくなってしまった。

公募ネーミングの「どまんなか」。決定に際して、「主婦が米屋に行って、『まんなか』とは言えそうだが、『どまんなか』くださいと言えるのか」と県議会で話題になったことを思い出す。

忘れぬうちに（上）

河内愛子

1　あるホームカミングデー

彼女は生き生きしていた。「根づいた花」の資料を求めて、ミズ・ロバータ・L・スティブンスは、二回、仙台と合衆国ペンシルヴァニア州のアメリカンバプテスト資料館を往復した。過去に尚絅（しょうけい）女学校で働いた宣教師方の、報告文書、私信その他の本のコピーを山ほど持ち帰り、古い「むつみのくさり」や人々の記憶などと合わせ、読み込むのに一心不乱だった。現存者のほとんどいない出来事を掘り起こし、想像するのは難しい。だが彼女が一番途方に暮れたのは、太平洋戦争末期、宣教師不在の尚絅、一九四四年、四五年のことだった。私が尚絅女学校に入学したのは四三年四月だが、「学徒勤労動員」の波を頭からかぶったのは、一年上と二年上の学年、特に二年上級の百四十七人であった。本科四十七回の卒業生である。

一九四三年六月、時の東條内閣は「学徒戦時動員体制確立要綱」を議会にはかることなく閣議決定した。九月には大学・高等専門学校男子学生の徴兵猶予を停止、十月には明治神宮外苑競技場で、銃剣をかついだ学生達が雨の中を行進する壮行会が行われた。四四年十二月には、一般男子の二十歳（数え年）だった徴兵年齢が、十八歳（現在の十七歳）まで引き下げられた。男性総人口の一〇パーセントが軍事に動員される事態に、工業・農業の労働力不足は深刻になるばかり。植民地朝鮮半島から働き手が連行され、国内ではまず成人の女性が動員された。それでもあらゆる産業が危機にあった。かくて四四年三月閣議決定されたのが「決戦非常措置に基く学徒全員工場配置」であった。これは中学校・女学校三年生（今の中学三年）という勉強ざかりから勉強を取り上げ、工場で働かせよとの命令を意味した。十四、十五、十六歳の少年少女の労働力さえ、あてにせざるを得ない状況に国は追いつめられていた。

だから尚絅の四年生は、もちろん四四年の四月には既に机・本・ノート・鉛筆をいっさい取り上げられ、教室の外、仙台市内長町のゴム会社で働き始めていた。しかし戦況はさらに悪化、十一月に入ると彼女達は故郷と家族から離れて、神奈川県茅ケ崎の「東京計器」なる軍需会社に送られることになった。災難は尚絅にだけ降りかかったわけではない。命令は一校の例外もなく、全国の中学校・女学校から幼い少年少女を連れ出したと思われる。一九六八年広島平和記念公園の対岸に建立された「動員学徒慰霊碑」の碑文によれば、動員された少年少女の全国総数は、およそ三百数

十万人と記してある。

「なぜ尚絅ともあろう学校が、そんなにおとなしく生徒達を送り出したのか？　少女達はどんな気持ちだったのか？」を一九四八年生まれのアメリカ人スティブンスさんはわからない。経験者に直接話を聞きたい、と彼女は言った。卒業後も母校には一番愛着の薄い学年と、私は聞いていた。それでも、つてを辿ると二十人以上が健在で仙台にいることがわかった。スティブンスさんの希望を聞いて母校に集まってくれるという人達がいた。

四四年秋、尚絅女学校四年生の百四十七名は仙台駅を発った。宮城県全体では二千名。彼女達は四五年三月、工場の中で卒業証書を受け取った。進学者・病人を除くと全員が家に帰されなかった。

その日から五十七年も過ぎている。二〇〇二年の夏だった。

『尚絅百年史』刊行の実務も担当している嶺岸久子さん、翻訳係の私、スティブンスさんの三人はいそいそとお茶の用意をし、机を並べた。澱（よどみ）の河原（広瀬川）を見おろす三階の教室を使わせてもらうことになっていた。吹き込む風がさわやかだった。一人また一人、あるいは数人で七十歳を過ぎた人達がややこわばって入ってきた。昔の私をおぼえていてくれる人がいて、びっくりもした。開会礼拝は、時間を少しでも長くとりたく、今回はとばして本題に入り一人ずつの自己紹介と当時

の話が始まった。

少女達は仲が良くいつも助けあった。石けんがなく油まみれ、カーキ色の作業服に戦闘帽、防空頭巾を手離さず、学徒動員の歌を歌いながら、朝早く工場に通った。旋盤工（せんばんこう）と同じに。会社も概して親切で、付き添いの先生方もやさしかった。ただ会社も先生も手の打ちようがなかったのは、日ましにひどくなる空襲と、乏しくなるばかりの食事だった。主食は雑炊かうどん、お菜はおひたしと漬物という具合になっていったから、たちまちお腹がすく。家が恋しい。家族に会いたい。でもなかなか帰してくれない。それでも共に過ごした若き日を語り合うことで、座はなごやかに盛り上がってきた。しかしスティブンスさんは、まだまだ聞きたいことがある。

「学校にいた頃、皆さんも校門を出入りするたびに天皇の写真の方角におじぎをしていたんですか？」

きびしい答えが返ってきた。誰だったろう？

「ヒロシマに原爆を落としたアメリカ人のあなたが、今頃わざわざそんなことを聞かれるんですか？　ほんとは私は今日だって来たくはなかった！」

なぜかその人は、ヒロシマがこうむった筆にも言葉にもつくせぬ残虐な大量殺戮（さつりく）への痛みと怒りを長い年月、放さずにきた人らしかった。

スティブンスさんの全身が固まった。こういう言葉は予期していなかったから。彼女のため、わ

ざわざ集まってくれる卒業生に会うことを楽しみにしていたのだから。司会の私もとっさのことに何と言っていいかわからなかった。シンとなったその時、誰かがおずおず口を開いた。

「こういうものを持ってきたんですけれど」

それはザラザラと黄ばんだ封筒に入った手紙の束だった。茅ケ崎から仙台の母に書いた十通以上の手紙。母の遺品を整理していた時、出てきたものと言う。白けた座がいくぶんやわらいだ。一通を読んでもらうことになった。薄れた鉛筆の字でつかえつかえその人が読み終えた時、私はひどく感動していた。不安なひもじい日々を生きている少女の、家族を思うやさしさ、友達へのいたわり、今の若者にはない言葉の温かさ。

これらの手紙の束が現れたことがつくづくありがたかった。だが、話し合う時間はもうなかった。はかばかしい挨拶も笑顔もなく私達は別れた。良い会でしたね、と三人して喜び合うこともなく、そのまま帰った。

ホームカミングデーは前日だけでは終わらなかった。

翌朝早く電話が鳴った。

「あなた、昨日は私達を侮辱してくれたわね。みんな怒って帰ったのよっ」

会の打ち合わせで一度電話で話したSさんの声だ。女学校時代学年のトップで県立女専に進んだ、

今に至るもリーダーと聞いた。今回も彼女が呼びかけて二十人も集まってくれたらしい。ずいぶん威張っている。何か失言をしたかしらん。みんなを怒らせたとは、ただごとでない。昨日の帰りはみなさんで食事をしたそうだ。考えてみる。昨日、何人もの話のあいだにひょっと私は尋ねたのだった。

「工場では何を作っていらしたんですか？」

「飛行機の部品でした」

思わず笑った。

「十五歳か十六歳のなんにもわからない女の子の作った部品で、いったい飛行機が飛んだのかしら」

ホームシック、飢え、空襲の恐怖にも不平も言わずひたすら頑張ったのは、お国のためという一途の思いがあったからこそ、その乙女心をあんたは笑いものにした、と彼女は言う。

あなた達を笑ったなんて、そんな……。二度と取り返せぬ十五、十六歳の勉強や楽しみの貴重な時間を根こそぎ奪って、そんな無意味な仕事を命じていた国家の、あまりの愚かさに呆れて笑ったのです、と言い訳しても聞いてもらえそうにない。このままいくときっと喧嘩（けんか）になる。癪（しゃく）にさわるが謝ることにした。

「みなさんのお心をそんなに傷つけたとは気がつきませんでした。申し訳なかったです。すみませんでした」

電話はガシャンと切れた。
そのあとスティブンスさんは「根づいた花」に、Kさんの手紙一通を全文引用したあとに「茅ケ崎のこの少女達の献身、忠誠、純なこころ、自分たちの生まれた国への愛は、彼女達を第二次大戦下の多くのヒロインの仲間に入れ、勝者とした」と書いた。いささか首をかしげながら、私はそのまま日本語に直した。彼女はそう思ったのだから。

2　出逢い

「尚絅女学校一年生のあなたをおぼえていますよ」
電話のむこうの明るい声が言った。先日の集まりの人だ。ひやっとする。また何か？　かまわず彼女は続ける。親がギリシャ正教会の信者だったので尚絅に入った。夫が数年前亡くなったから、今は一人暮らし、子供はいない。目下の生き甲斐は、大正琴の稽古と美輪明宏なんですよ。おやまあ！　七十代でもそういう人がいるんだ。
「先日はSさんが失礼な電話をあげたことを聞きました。私達みんなが怒っているとか申し上げたそうで、そんなことはないんです。もう一人の友達とお詫びに伺いたくて。いかがでしょうか」

なるほど、Sさんがあんまり怒って興奮していたから反論もできずまわりは黙って聞いていた。沈黙は同意ととられる。どこにもある風景だ。もちろん私は嬉しかった。彼女Gさんはどこに座っていた人かしらん。

数日後、Gさんと、母への手紙を持ってきたKさんが、はるばるゴディバのチョコレートまでおみやげにして来てくれた。三人で来し方をいろいろ話した。それぞれに悩みや物語がある。見ず知らずとは言い切れぬつながりがあった。以来、私達は年に二、三回は会うようになる。Gさんは、ほんとに美輪明宏の追っかけだった。次々と彼のテープと著作が送られてくる。おかげで美輪氏にずいぶん明るくなった。息せき切った電話も来る。
「〇〇チャンネルにこれから美輪さんが出るから見てください」
あちこちにかけてる上に、自身が見そこなっては一大事だもんね。
とめどない話を何となくおかしがって聞いていると、彼女は一生懸命に言う。
「美輪さんは長崎の原爆の被爆者で、ほんとの反戦なのよ。ほら、テープの中の彼の作った従軍慰安婦の唄もとっても良いでしょう。聴いてくれた？」
そして私はとうとう仙台の何とかホールで、Gさん、Kさんと三人並んでお芝居「黒蜥蜴（とかげ）」を観ることになった。

「友達にチケットをたのまれて取ってあげたら、都合で行けなくなってね、誰かにあげてと頼まれたの。あいこちゃんにはどうしても彼の素晴らしさを見せたいの」

Gさんは資産家の未亡人でもなく私の分までチケットを買う余裕があるとも思えないから、その話を本気にして出かけたのである。実はあの高価なチケットは彼女が買ってくれたのかも、と今は思う。残念ながら満員の大ホールで芝居のせりふはほとんど聞き取れなかった。「黒蜥蜴」観劇何度目かの二人の楽しそうな姿が見られたのは良かった。そういうGさんだが、ほかにだって幾つも大好きなものがあった。たとえば、世界的オペラのプリマ、マリア・カラス。彼女が聴くのはLPかCDであるが。大ブレイク中のピアニスト、フジコ・ヘミングのこともずいぶん聞かされた。私もフジコさんのピアノは相性が良くCDを何枚か買っていたから話が合った。

とにかく、美しいものやおいしいものに目がなく夢中になる彼女は、昭和初期の少女がそのまま七十代になった不思議な面白い女性だった。誘われたおつきあいで、ホームカミングに同級生と尚絅まできたものの、彼女はほとんど口を開かなかったみたいだ。恐らく茅ケ崎時代の十五歳の彼女は、心の底ではこんな戦争大嫌いと叫んでいる反・軍国少女だったに違いない。年中作業服一枚で機械を動かす生活は、幼いながらに彼女の好みと正反対だったのだと思う。

おたがい調子を悪くして会えなくなる少し前のことだった。Gさんは彼女が通っているギリシャ正教会のイースター前夜祭の話をしてくれた。私の記憶がどこまで正確か大して自信はないのだが。

「イースター前夜はね、コワイヤー（聖歌隊）が徹夜で歌い続けるの。信者はほとんど立ちっぱなし。そしてイエス様のよみがえった時刻でしょうね。夜明けの光がさっと射してきた時、主教様がひれ伏して大地に接吻なさるの。何とも言えない美しい瞬間よ」

Gさんのキラキラ輝いた眼を思い出す。なつかしい。もう私の言葉は届かなくなってしまった。あの頃の彼女に会いたい。

初めて二人が訪ねてくれたあと、私は尚絅にKさんの手紙の束の保管をお願いしてみたが、資料室を作る余裕がないので無理とのことだった。それから思いついて戦災復興記念館（仙台市）に電話した。次々持ち込まれる思い出の品で倉庫（?）はパンク寸前とのおことわり。私は粘った。当時の少女のけなげな息づかいを燃えるごみで煙にしたくはない。

「手のひらに乗るぐらいで、分量なんかないと同じです。一度手にとってごらんになって下さいませんか」

KさんとGさんは全部のコピーをとり、実物を持って行った。手紙の束は、預かってもらえることになった。Kさんはそのあと同級生に会っては、当時の記憶を新しく掘り起こして伝えてくれた。

足の悪さと夫の介護で外出がままならぬ棟方郁さんの所から当時の日記帳まで借りてきた。

好き嫌いのはっきりしたGさんと対照的に、Kさんは自己主張の少ないおだやかな人だった。助けを呼ばれる前に、さっと身体が困っている相手の傍に行っている共感力。棟方さんの日記も冊子にしておけば残るのに印刷屋にはさっさと断られた。字は消えかかっているし、昔の漢字は読めないと。パソコンの出来ない私が困っていると、思いつきもしないうちに「私が書き写しましょう」と言ってくれた。Kさんの字は確かに美しく読みやすい。嶺岸さんも手伝ってくれて「十七才の日記」ができ上がった。Kさんはそういう人。同級生からも職場の人からも信頼され愛されている人であることが、日と共にわかってきた。聞くところによれば、同窓会総会に毎年、小柄な彼女は一人でリュックを背負ってあらわれる。同級生の姿はまずない。昔の先生もいない。顔見知りの後輩とは声をかけ合うようだが、淋しくないですかと聞かれると、彼女はにこにこして答えるらしかった。「学校がなつかしくてくるんですもの。淋しいとか思ったことはないですよ」

彼女もまたしっかりと、自身の意志で動く人なのであった。

二〇一一年の大震災を境に、Kさん、Gさん、私とみな健康をそこね、一緒に食事をする機会はなくなってしまった。文通や時折の電話はあるが、淋しい。でも私の思いは変わらない。七十代、八十代であろうが、人と人は出逢うべくして出逢う。それは天から降ってきた恵みとしか考えられない。

河内愛子（こうち　あいこ）一九三〇年、仙台市生まれ。一九五九年に夫の仕事で山形市に移る。八十歳まで自宅で中・高生の英語教室を続けた。現在、市内南栄町に猫と二人（?）暮らし。

対詠　ごきげんいかが？　PART 60〈2016〉

O　小野澤繁雄
N　布宮慈子
K　河村郁子

かすかにも金木犀の香りして秋ふかくなるこの世の夕べ　9月27日　N

金木犀（もくせい）のあはき香りにいざなはれ木下に入りて息をひそめる　9月30日　K

みるとなると目につくものが花なれば今日二、三か所金木犀の花　10月3日　O

店先に葡萄並びをり安芸クイーン、シャインマスカット、ロザリオビアンコ　10月8日　N

病床の父に剝きゐしマスカットわが口内に入れたる不覚　10月10日　K

果物を口にすることなさそうな子が来れば梨、柿の皮剝く　10月11日　O

アケビ好き茂吉はいかに食ひしかとアケビの皮を炒めつつ思（も）ふ　10月20日　N

スーパーの滑子（なめこ）ワンパック手に取りて山路にたんまり採りし日思ふ　10月23日　K

みちの先垣にまつらうごとくにし烏瓜下るみるなき数に　10月24日　O

南天の赤き実はあり小鳥来てついばむ冬の訪れ近し　11月3日　N

訪ねこし奥つがるの地に満天星（どうだん）の朱極まれり　地上の星か　11月5日　K

この秋はかかし祭りの出し物に車いすテニスいすは本物　11月6日　O

秋深し介護施設へ送りてのち義母（はは）の植ゑたる菊の花摘む　11月7日　N

咲く花の絶えて久しきわが庭の千両の実に朱の色映ゆる　11月9日　K

白かったり紅かったりと生垣に刈り残されて花は椿花　11月14日　O

舞台には赤きドレスの人をりてジャズの歌声ゆふべを満たす　11月19日　N

スーパーの駐車場に赤いW（ワーゲン）わが愛車なりしとしばし偲びぬ　11月21日　K

二株というほどの鉢にみることもあやに少なき金襴紫蘇みる　11月24日　O

冬タイヤに替へて雪なし雪国のテレビが映す東京の雪　11月24日　N

雨戸明け見はるわが庭異界なりなべてを覆ふ霜月の雪　11月30日　K

銀杏の葉の落ち切らぬうちに雪が薙ぐＮＨＫの絵にしてみるなき　11月30日　Ｏ

暮れ方の美(は)しくなるころ南西の空に相寄る月と金星　12月3日　Ｎ

汐留の街路樹に残るわづかなるいちやう黄葉光を受ける　12月9日　Ｋ

港区に北限とする榧(かや)ありてためらわず実を拾う人あり　12月10日　Ｏ

切られゆく上野の森の大き木はヲウヲウといふ声あげるらむ　12月15日　Ｎ

黄葉を落とし終えたる大銀杏すべての枝が青き空指す　12月18日　Ｋ

どんな水も拒まぬ海を「同事」という清見寺門にことしさとしは　12月19日　Ｏ

前号作品短評Ａ〈小野澤〉

●矮鶏檜葉（ちやぼひば）といへど育ちて蜘蛛だけが木々のあひだを自由に遊ぶ　布宮慈子

矮鶏檜葉は生長がゆっくりで、初期はとくに遅いという。そんなところからか、（と）いへど育ちて、は。下句で、（蜘蛛だけが木々のあひだを）自由に遊ぶ、には何か空気感がある。「大将軍」は陰陽道の方位神の一つで、三年に一度方角を変えるらしい、平成二十八年の節分の日までは東の方角だったようだ。その方角の土の掘り返しや造作はできないとされ、どうしてもというときに「大将軍遊行日」がある（山形内陸地方の土着信仰）。

伐採を決めたる後に知らさるる南に在（おは）す大将軍様

転結があり、それも何か語りといっていい調子があって、どの歌も風趣に富む。

●暑き日のつづきて瓶の水あつしメダカの稚魚のおほよそ死にたり　丸山弘子

一連タイトルは「夏」。（自宅）庭辺のオンブバッタの歌から詠い出されている、その四首目。このところの夏の暑さをどこから詠うか。小さな事件性。

メダカは売っているのをみると、種類もあれば値段もそう安くない。ひとつ前の歌は、金魚の歌。こちらも同じく瓶中の、それにしても掌中のような生活圏のものだ。

近寄るを気配に察し浮かび来て瓶の金魚は餌を欲（ほ）るなり

作者は木草、小動物に詳しいが、十首目「アナベルとふ白きあぢさゐ」には驚いている。

●何ごとも変はらぬやうに見えながらあなたから私から去つてゆくもの　結城　文

ゆったりとした詠みぶりで、木草の日本列島、日本（の高温多湿）から、十年ほども前のおとずれ、涸沢ヒュッテ（北アルプス）を思い起こし、失敗を触媒とする生き方と、遠き道のりを反省する心持まで、振れ幅も、大きく摑み直しをしているようなところが面白い。つまり、こういうことだと、大事でなくつぶやいている。

至近では、東の間の花火に心をとられ、楠の暗き木下に葉を仰いで、次の歌のような、いずれにせよ、とりとめもあらぬ思ひ、にとらわれてもいるのだ。

楠の暗き木下に仰ぎをりこの木の葉の数いかほどならむ

●天皇の後追う如く逝きたもう師の齢より二十七年過ぐ　池田桂一

この師は、上田三四二。冒頭の歌、また四首続きで師をしのぶ。売子（えご）の木の花、花季、沙羅の木の葉ずれ、などの多く花木によって回顧されている師。しみじみとした味。さいごに、余り詠うことのなかったような父の歌が置かれ、その歌とあいだの身辺の歌から一つ。どちらも少し徹ったさびしさがある。

群鳩のくぐもる声の透りくる台風一過の昼の目覚めに

一つ部屋に寝ることもなく過ぎたるを今にし思う父の寂しさ

前号作品短評B〈慈子〉

●梅雨明けを待ちいしごとく木立より蟬の声はす今朝の散歩に　　市川茂子

蟬と散歩の取り合わせにより、気持ちのいい一首となった。梅雨明けのパキッとした感じが伝わってくる。たしかに蟬は急に鳴き始めるが、夏をどのように感知するのだろうか。健康ブームの現代を切り取った次の二首。テレビで「〇〇に効果がある」と食品を取り上げると、とたんに店から消えてしまうらしい。自分もその列に加わることで人の心理を写し、おかしみを誘う。

テレビ見て来たるスーパーの棚の前そこだけ空いて押し麦の場所

押し麦の効用テレビで見し人と棚の前にて言葉を交わす

●人が住む中間色を挟み込みあとはふたいろ夏のみちゆく　　小野澤繁雄

「ふたいろ」とはどんな色だろうか。道や住宅街の左右と考えれば、緑と土の色などを思う。水平の方向とすると、一連の題である「空、緑」か。まっすぐに通っている夏の道をゆくのは、いかにも楽しそうだ。視点に特徴があり、いろいろな読みができる歌。次は漢字に注目した歌。所ジョージがずっと「げっきょく」駐車場だと思っていたと、何かで告白したのを思い出した。

月決（め）は北海道、高知県にのみ見えてほかは月極（駐車場）なると

●慣はしの似通ふことに出合ふたび新羅の文化に親しみ深む　　河村郁子

短信によると、作者は韓国俳句研究院の十周年記念で慶州を訪れたようだ。郭院長の自宅に招かれた折、オンドルのベッドは韓国独特だろうが、さまざまな作法が日本と似ていることに驚く。新羅の文化の一端をいっそう身近に感じている様子がわかる。

西域ゆ伝はり来たる文明が慶州を経て日本に栄ゆ

●若葉薫る村すつぽりと隠しつつ　　谷垣滿壽子

大木なのだろうか、若葉が香りを放って村全体を隠しているという。この大仰な対比を面白く読んだ。村を覆うのではなく、隠すと言い切ったところがミソか。次の句は「降りみ降らずみ」という語に注目した。降ったりやんだり（降ったり降らなかったり）を表す連語だが、あまり目にしなくなったことば。詩語としても積極的に使っていきたいものだ。

濃紫陽花降りみ降らずみ昼下り

●虎尾草や空のからだを持て山へ　　新野祐子

空っぽのからだを山へ向けて、ひたすら歩ませる。このトラノオはおそらく白い花。花が咲いているのを見ても、うれしい気持ちは起きてこない。この一句に深い悲しみを感ずるのは、わたしだけだろうか。一連のはじめの句も、透明感のある寂しさが胸に迫る。

人消ゆる谷ほの白くほととぎす

エッセイ教室「清紫会」の作品より

止まった冷蔵庫

市川茂子

三ヵ月前頃から冷蔵庫の調子が良くないので、急いで電気屋さんに見てもらうと、二十年近くも使っているからもう寿命が来たようだと言う。

この夏の最中に壊れたら大変だと思っていると、冷蔵庫はともかく、こちらの体調も弱ってきた。

この間はめずらしく風邪を引いて咳が止まらなくなり、薬を飲んでも効き目がない。こちらの寿命もどうなるかと心配したが、十日ほどで咳が止まって、一息ついたところで、冷蔵庫が止まってしまった。

お盆休みに入る前なので、あわてて電気屋さんに行って手配してもらったら、三日後に取替えに来てくれることになった。こんどは一人分くらいの小さなものにと言って、見立ててもらうことにした。

今まで使っていた大きい冷蔵庫は、一人暮らしになってからは入れる物も少ないので、何でも入れてしまう。夏の暑いときは、こちらが入って涼みたくなるほどだ。電気料もかかったようで、小さくなったら年間でも万単位で節約できるという。

取り替えるまでの三日間は、冷蔵庫の中を終活のような思いで片付けて、いま必要な物には毎朝近くのコンビニで氷を買ってきて冷やしたりしながら、外食やコンビニのお弁当で、何とも不自由なことだった。

急に小さくなり、冷凍庫の位置も下に変ったので、使いなれるまでは戸惑ってしまう。

田舎に行って来たからと、時どき野菜などを持ってきてくれる奥様が、またスーパーの買い物袋を両手に提げて来た。ジャガイモ・玉葱・人参・キュウリ・茄子・ゴーヤなど、いつもは全部冷蔵庫に入れたのに、もうスペースがない。

仕分けしながら、大事に食べることにしている。毎日のささいなことで思いめぐらすのも、惚け防止になるだろう。いまのところ冷蔵庫のことでいっぱいなので、身の回りの終活はまた先延ばしになってしまう。

取るに足らない、この夏の思い出だ。

入院

大石久美

今年、七月初旬、急に手足に痺(しび)れが出て、歩きにくくなった。足を引きずるようになったので、近くの森山臨海病院に出掛けた。

今まで知らなかった病院であるが、本館1、別館2の大きな病院である。緊急の手術やそのリハビリに信望があり、最近めきめきと有名になったそうである。

担当の医師は、さっと私の患部を見て、

「明後日(あさって)から入院するように」

と言われた。私は大丈夫かしらと思ったが、病院の構えや知合いの医師もいる事だしと、指定された日に息子に伴われて入院した。

その日から一週間は、検査、検査の毎日。大きな機械の中に身体が埋まるようにして、何回も何回も診断を受けた。

一週間後、

「今日で検査は終りです。頸椎(けいつい)を病んでいますので、痺れはそこからきています。お年を召しておられるので、無理にとは言いませんが、手術は必要です。なさいますか?」

と主治医の阿部先生ほか、三人程、医師が立ち並ぶ中で言われて、つられるように、

「お願いします」

と返事をしてしまった。

次の日、螺旋型の機械のような処に寝かされたが、それからの事は、まったく覚えていない。

気がついたのは、翌日だったろうか、身動きがならない程痛い。私自身は覚えていないのだが、手術後、首を安定させるために巻いていた首輪を、私は苦しがっていくつも毀(こわ)してしまったそうである。このおばあさんにこんな力があるのかと、医師や看護師もほとほと困ったという。

以上は、手術に立ち会った人達から聞いた事であり、私自身はまったく覚えていない。しかし、それ以降、私には七十日余りの入院の日々が待っていたのである。

意識が戻ってから五日程たった頃、私は起こされて体操をさせられ、廊下を多分三百メートル位と思うが、午前、午後と杖を持って歩かされた。嫌も応もないのである。

作業療法士や理学療法士という人がいて、どんどん歩かされる。はじめは杖を持ってよいのだが、次第に杖は取り上げられ、更に辛いのは一、二段の階段を上らされる。これが恐くて、なかなか足が上がらない。

はじめは午前、午後と一時間半ずつあるこの時間が嫌だったのだが、日がたつにつれ、指導の人達が善い人が多いせいもあって、自分から運動場へ出て行くから不思議である。

何はともあれ、九月半ばに、来週退院という日が決まったときは嬉しかった。

しかし、歩くにはシルバーカーを使うように言われ、新しく購入した。退院までの一週間は、専らシルバーカーでの練習、街歩きをさせられた。

退院した私には少々手足に痺れは残るのだが、シルバーカーを操って買物をしに毎日、街中を歩いている。

「清紫会」だより

◆第146回　平成二十八年八月十八日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・止まった冷蔵庫／林博子・「もの」のかたち／松井淑子・道具の話

◆第147回　九月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉林博子・あたり前の風景（エメンタール地方を旅して）

◆第148回　十月二十日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・困ったもんだ／大石久美・入院／松井淑子・どうでもいいこと

（松井）

無二の会短信

◆毎年開催される秋の区民文化祭がある。参加する各団体の役員達も、八月頃から準備をはじめた。短歌連盟も、作品募集の案内を発送することから、互選点数を集めて集計するなど、当日までの準備をする。十月末の大会には、奥村晃作先生を迎えて歌評や指導があって、一つの行事が終った。いよいよ背後に迫ってくる冬の足音を感じながら気忙しくなってくる。

市川茂子

◆母が九十四歳で十一月に去って、まだそう日にちが経っていませんが、生死の違いは大きいものがあります。母（静子さん）とは、亡くなる五日前に、互いに拳を打ち合わせてお別れしたのですが、延命治療を受けず（本人の意思）、兄さんが、訪問看護と担当医の来診を受けながら、在宅で看取りました。当日朝も、（手引きで）トイレにいくことができたのですが、午後には息をしていない状態となり、そのまま逝ってしまいました。悪い所も、痛いところもなかったので、平穏死（老衰）となるようです。父が苦しい死だったので、いくらか気休めになるところもありますが、一日一日身に滲みてくるようです。

小野澤繁雄

◆知人から体にいいからと黒ニンニクをもらった。結構な値段に驚いた。ひと球分で六百円～七百円くらいなので、あんな小さなひと欠けで百円にもなってしまう勘定だ。調べてみると、黒ニンニクの効能というのが凄くて、アンチエイジングの代表のように取り沙汰されているが、本当のところは分からない。効能が出る前に亡くなってしまう方がいるからだろうか、それとも実感していない方が多いからだろうか。

次なる挑戦は自家製黒ニンニク作りに決めた。

神村ふじを

◆好きなこと ㈠読むこと。バス待ち時間五分でも何か読まずにいられない。㈡紙にペンで字を書く。実はケータイ、メール、ネット何一つできないせいもある。㈢ひそかに思っているのは「友達であることこそ我がアイデンティティ」。ここ数年のうちに布宮、新野、鈴木京子ちゃんのような若い親しいお友達ができたことも、とてもしあわせ。

河内愛子

◆秋日和に誘われて散歩に出た。通りがかった小学校の活気に満ち溢れた空間に吸い込まれてしまった。御多分に漏れず、セキュリティーの手続きを済ませてから会場に入った。一昔前までは、母親か祖母たちが多かったが、現今はそれぞれ自慢の撮影器機を構えている父親たちが大勢来ている。ほほえましい家族の情景には心温まるが、いろいろの事情を持つ児童もいるだろう。こういう場合に、元気な高齢者の出番はないだろうか。講習など受け、認可を受けて、少しでも世代間の心身の断層を埋めるなど役に立てるのではないかと思ってしまった。

河村郁子

◆今年の秋は、台風が大変多くやって来ました。昔のように女性名の台風でしたら、気象庁は大変だったでしょう。なにかよくない事が起こるかしらと思っていると、熊本、鳥取で地震がありました。これ以上、災いが起こらないようにと願わずにはいられません。晩秋となりましたが、晴天が続くことを願っています。

谷垣満壽子

◆この夏、緑風出版から『検証・大規模林道』を出版した。私たち葉山の自然を守る会が呼びかけて、大規模林道問題全国ネットワークの北海道、岩手、福島、富山、広島、愛媛の仲間と共に阻止闘争史をまとめたのだ。十月一日に出版祝賀会を東京で開いた。運動に関わった元衆議院議員、新聞記者らが集まってくれた。私たちの運動は、彼らの大きな協力があり、実施主体の特殊法人を廃止させ勝利することができた。残念なことに現在、環境問題に精力的に取り組む国会議員やジャーナリストのなんと少ないことか。資本の論理で山や川の破壊が進んでいる。天災も多発している。暗澹たる思いだ。　新野祐子

◆この秋はひどい天候不順で、雨が降りつづいたり、十月下旬というのに夏のような暑さが現れたりする。ことに私の家は午後から西日が差してかなり暑くなるので、いまだに半袖の服を着ている。そういえば毎年十月初めになると方ぼうから漂ってくる金木犀の香が、今年は花は咲いているのにさっぱり香ってこない。雨のせいか、へんに暑いせいかどちらだろうと不思議に思っている。　松井淑子

◆鈴木京子さんが亡くなられて驚いている。鈴木さんのコーナーが始まってから、「展景」が手許に届くと、一番はじめにその頁を開いた。お顔も声も知らないけれど、文章と写真で人柄に親しみを感じ、読ませていただいていた。こんなことになるとは知らず、まだまだ続くと思っていた。が、鈴木さん本人は六年前に死を覚悟の上での農業だったそうだ。それほどまでに何故?と聞きたい気もするが…。ご冥福を心からお祈りいたしております。　丸山弘子

◆それは、本当にアッという間だった。いつの間にか、ハルの背が私を追い越した。ハルの足が私の足より大きくなった。まだ、抜かされていないのは体重ぐらい。声は少し低くなったようだ。少年が少しずつ大人に変化していく過程を間近で見ることのできる幸福を味わっている。来年初夏、母の十三回忌を行います。母もどこかで、ハルの成長を見てくれているだろうか。　山内裕子

◆三週間ほどかけてアフリカのエチオピア、モザンビーク、南アフリカ、ボツワナと回ってきた。つくづく感じたことは、アフリカ大陸の広大さである。移動にはヘリコプター、セスナ機、プロペラ機などが空のタクシーのように使われている。未分化のエネルギーをひしひしと感じた旅であった。　結城　文

◆あと一ヵ月で、母や叔母達の齢を越えることになる。冬になると、風呂上がりには必ず呼ばれて手足のあかぎれの手当を手伝った。いわしの頭を炭にして、ご飯粒と練り合わせたものを傷口に塗り込むのがいつもだった。暖房もままならなかった当時を考えると、家事の仕事上では避けられない事情だったのである。それにつけても現在の環境は、実に恵まれている。今年の冬は、例年より寒さが厳しいような気がする。諺に「楽あれば苦あり」とあるように、そのうちに四季の移ろいも冷夏や暖冬などと、正常ではない極端な気候の繰り返しが訪れるようになるかもしれない。　池田桂一

編集後記

◆今回からエッセイのページに、河内愛子さんが参加することになった。まずは少し長いが、仙台の女学校の話を二回に分けて、その（上）を掲載する。戦時中、男子学生や女学生はどのように駆り出されたのか、わたしたちは知らない。一学年ちがっただけで随分な差があったのだ。「展景」の主宰者だった布宮みつこは、女学校のときに藤沢の工場に行ったと言っていた。河内さんの貴重な経験と時代の空気を感じとってください。

◆山形市内の餅屋さんで「綿入れ餅」を見つけた。懐かしい。綿入れ餅というのは塩餡を搗きたての餅でくるんだもの。わたしの実家では冬になると綿入れ餅を食べていた。家で塩餡をつくり、二十個くらい丸めて菓子箱に入れ、近くの餅屋さんに持っていく。そうすると餅屋さんが綿入れ餅にしてくれる。そのまま焼いたり、油で揚げたりして、あとは好みだが砂糖や砂糖醤油などで食べた。このごろは近所で聞いたこともないから、食べている家はないのかもしれない。山形市で見つけた綿入れ餅は、実家で食べていたものと違って小ぶりで上品だ。冬期限定。なにも付けないで食べる。塩餡がほっこりして、うまい。

本誌の「清紫会」は毎月、東京でおこなわれているエッセイの会。命名は外山滋比古先生。先日、外山先生の『茶ばなし』という本を古書店で手に入れた。米澤新聞のコラムから百五十篇を選んで千五百部つくったものだという。その中にこうあった。「大福餅はもっと好きである。（中略）たまに見かけるのは、たいてい皮の餅があつい。あれはいただけない。中のあんの色がほんのりと見えるくらいうすい餅で包んであるのが上等である」。山形の餅屋さんの大福餅は、もちろん綿入れ餅も、餅がやや厚めで、いかにも餅の味がしておいしいのだが……。山形の大福餅を外山先生にお持ちしたい衝動に駆られた。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 84号
二〇一六年十二月二十五日　発行
編集・発行人　布宮慈子
制作　スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright© 2016 MUNINOKAI. All rights reserved.